

インドの博物館

柳 沢 悠

一 インドの博物館

博物館という概念は、インドにとってイギリスの植民地支配とともにもたらされた外来的な概念である。博物館の設立はイギリス支配とともに始まったが、今日、インドには五〇〇を超える数の博物館がある。ちなみに、日本では博物館法に基づく登録博物館だけでは今日八〇〇を超えるそうである。日本の一〇倍の人口を擁するインドとしては、この数は少なすぎるといふべきかもしれないが、日本とインドとの間の経済水準などを加味すれば、インドでの博物館の位置は低すぎるといふより、結構、がんばっているといふのが私の印象である。次に述べる例えは国立博物館にせよ、カルカッタのインド博物館にせよ、

それぞれ都市の中心部に実に立派な建物で存在している。東京でいえば、丸の内や大手町にあつて、よく目立つという感じである。上野の国立博物館や科学博物館より、都市のなかでの相対的な位置は大きいようである。

現在のインドは連邦制で、中央の政府と、ある程度の独立性をもつ地方の州政府からなる。博物館も、デリーにある国立博物館のように中央政府の管轄するものもあるが、それぞれの地方では多く州首都に州政府博物館がある。さらに、インドで特徴的なことは、インド考古局が管轄する三三の現場博物館があることである。これは、カジュラーホ、サーナーチー、アーングラなどの歴史的に重要な建物のあるところや、発掘の現場に置かれている。

こうした主として歴史に関わる博物館に加えて、科学博物館があつ

て、「科学博物館・自然史博物館委員会」が管轄している。そのほか、空軍博物館や鉄道博物館はそれぞれの政府部局の管轄である。

このような公立の博物館に加えて、民間の博物館も少なくないし、そのいくつかは、大変に高い水準を維持している。その最も良い例は、グジャラート州のアムダーバードにあるキャリコ織物博物館である。これについては、後に述べたい。以下、S・ブンジャの区分に従いながら、インドの博物館の歴史を略述しよう。¹⁾

二 歴史

(1) 植民地支配と博物館

インドを支配し始めたイギリスが、インドの自然や物産や社会・文化をいかに認識し、そこにどう関わろうとしたかは、いうまでもなく歴史学の重要な課題である。インドの歴史的な遺物、植物・動物・鉱物の標本などを展示する博物館の歴史は、こうした認識を示すものとして極めて興味深い対象であろう。西欧の文化の視点から「遅れたアジアの文化」を「発見」し、固定化することで創出したというオリエンタリズム論を始め、この点ではさまざまな議論がありうるであろうが、残念ながら、私にはそれを紹介する能力はない。

一九世紀に、イギリスは植民地支配の遂行のために、インドの植物・動物・鉱物・自然についての情報収集を重視していた。一八〇〇年前後に南インドを数ヶ月にわたって調査したブキャナンの旅行記は当時

の状況を伝える貴重な史料であるが、この調査の中でブキャナンは例えば山地に行けば、当時木材として重要性がまわっていたチークの木がどのくらいあるか、詳細に報告している。イギリスは、インドの国土を測量・調査するインド地理調査局や植物調査局を作った。インドの植民地支配の観点から、インドの植物や農産物は特に重要だった。イギリスはロンドンの「キュー・ガーデン」において熱帯植物の組織的な収集・育成と研究を行うとともに、インドではカルカッタに植物園を設置してインドの熱帯植物の収集・保全・育成を行ったという話しを聞いたことがある。これなどは、植民地支配の目的と植物園の設置が極めて直接的に結びついている例であろう。

文化の分野では、インド考古局やアジア協会 Asiatic Society が作られて、イギリス人でインド文化にあこがれてインドの芸術や文化の保護を主張するオリエンタリストと称される人々が出てきた。彼らは、インドのサンスクリット文化がラテン語と同様に古く、インドの芸術や文化が高度に発展していたことに気がつき、その保護・発展を目指した。インドの遺物や芸術品の一部はイギリスに集められて、今日、英国博物館などに所蔵されているが、次第に、アジア協会の人々を中心に、インド自体の中でそれらを保管・展示する博物館をつくらうという動きが生じてきた。

この動きの最初の成果は、二〇世紀始めまでは英領インドの首都であったカルカッタのインド博物館である。アジア協会の意向を受けて、一八七五年には博物館の建物は出来上がり、文化・芸術・考古関係の

セクションと、動・植物、地理学、人類学などのセクションをもつ博物館が設立された。マドラス（今日のチェンナイ）は、南インドのマドラス管区の政庁所在地であった。ここでは、すでに一八二八年に、ロンドンのアジア協会の支部であった「マドラス文芸協会Madras Literary Society」はマドラスにおける博物館の設立を希望したが、それが実現したのは二〇世紀に入ってからであった。この博物館（今日の「タミルナードゥ州政府博物館」）も、芸術・考古などの歴史のセクションと、鉱物、地質、動物、植物のセクションをもっている。英領インドのもう一つの中心地、ボンベイ（ムンバイ）では、有名なインド門の近くに、一九〇五年にインドを訪問したジョージ王子（後のジョージ五世）によって礎石を置かれた、博物館が作られる。ジョージ五世にちなんで「プリンス・オブ・ウェールズ博物館」と名づけられた。

これらの博物館は、それぞれの都市での帝国のスタイルを具現するような建物だった。カルカッタのインド博物館は、カルカッタ大学、高等裁判所、上院などの建物を設計したWalter L.B. Granvilleによる設計で、ヴィクトリア調の壮重な建物である。カルカッタの最も繁華な中心地にそびえている（写真①参照）。ボンベイのプリンス・オブ・ウェールズ博物館は、有名なインド門を設計したGeorge Wittetが設計したもので、ムガル時代の建物の特徴をとり入れたインド・サラセン調の建物である。マドラスの博物館もHenri Irwinが設計・デザインしたもので、ムガル皇帝アクバルの建物を真似た建物である。いず



① インド博物館（カルカッタ）



② ヴィクトリア記念博物館（カルカッタ）

れも、植民地支配者イギリスの力と威厳を誇示するものだったに違いない。ただ、S・P・ンジャは「建物は面白いが、近代的な基準から見ると博物館としては不適切だ」と酷評する。展示や保全のための十分な施設がないのである。展示場は暗く、部屋は巨大で、天井が高いために埃とくもの巣が得意やすいなどの問題点があるという。

これらの博物館がインドの歴史的な考古発掘物・芸術・工芸や動植物を展示するのに対して、植民地宗主国イギリスの支配そのものを展示する博物館も作られた。カルカッタの「ヴィクトリア記念博物館 Victoria Memorial Museum」は、一九〇一年に死去したヴィクトリア女王を記念して作られた。この博物館を構想したインド総督のカーゾンは、これは非インド的なデザインのも、古典的なできればルネッサンス的な建物を作るべきだとし、設計の William Emerson はロンドン

のセント・ポール教会を真似たという（写真②参照）。一九二一年に完成された。展示されるものは、イギリスの植民地期に関わるものである。ヴィクトリア女王の肖像画、所持品、イギリス行政官の肖像画などが中心である。植民地期に関わる展示をしているのは、もう一つマドラスの「セント・ジョージ城砦博物館 Fort St. George Museum」がある。Fort St. George というのは、植民地期のマドラス管区の政庁のあった場所の名前である。博物館は、インドが独立して直後の一九四八年に作られた。対象は、主としてイギリス植民地支配が確立する過程のマドラスや南インドに関わるものである。

（2） ナショナリズムと民間博物館

こうしてイギリス植民地支配の中から、植民地宗主国の文化の威厳を誇示するような博物館が作られる一方で、一九世紀の末から二〇世紀前半にかけて、インドの中で英国の支配に反対する民族運動が発展する。民族運動に加わったインド社会の上流階層や知識人たちの中には、インドの文化や伝統を高く評価し、その伝統的なインド文化の高さをてこに、イギリス支配に対抗してゆく動きが高まった。この中で、インドの芸術や文物を集めた博物館が私人によって作られるようになった。その代表は、グジャラート州のアムダーバードにあるキャリアコ織物博物館であるが、これについては後ほどに詳述する。カルカッタにある「アストシュ・インド芸術博物館 The Ashutosh Museum of Indian Art」は一九三七年に、カルカッタ大学の裏手に設立された。

カルカッタ大学の考古学研究室によるベンガル地方からの考古発掘物や、工芸品を展示している。カルカッタ大学に集まった、インドの高等教育層のインド文化への誇りを示したと、ブンジャは指摘している。

その一端は、この博物館に所収された、宗教的な道具、玩具、人形などの工芸品に見ることができると、ブンジャは、さらに、マハーラーシュトラ州プネー市にある「ラージャヤ・ティンカル・ケールカル博物館 Raja Dinkar Kelkar Museum」もこの系統に数える。この博物館は、Dinkar Kelkar が六〇年間を費やして収集した、インド各地の村落や都市の日常生活の道具を展示している。三六のセクションに分かれて、壺、ランプ、容器、ペン立て、くるみ割など、村落の地主や商人などの家にあるものである。ムガル期の一七世紀のランプなどもあるという。さらに楽器、金属器類もある。

(3) 宮殿博物館

インドは一九四七年に連邦共和国として独立するが、その際、インドの各地に残っていた藩王国は廃止された。宮殿の一部には、藩王家族が収集した美術品、家具調度品などを展示して、博物館になるものもあった。ハイデラバード、バローダなどの博物館が有名である。

三 国立博物館とキャリコ織物博物館

インドを訪問する機会は結構あるが、これらの博物館のうちで実際

におとずれたものは多くない。デリーの国立博物館、カルカッタのインド博物館とヴィクトリア記念博物館、マドラス（チェンナイ）の州政府博物館とフォートセントジョージ博物館、グジャラート州のキャリコ織物博物館、ボンベイのプリンス・オブ・ウェールズ博物館ほかである。その多くは、二〇年以上も前の参観で、余り記憶はない。そこで、ここでは、比較的最近訪れた、二つの博物館を紹介しよう。

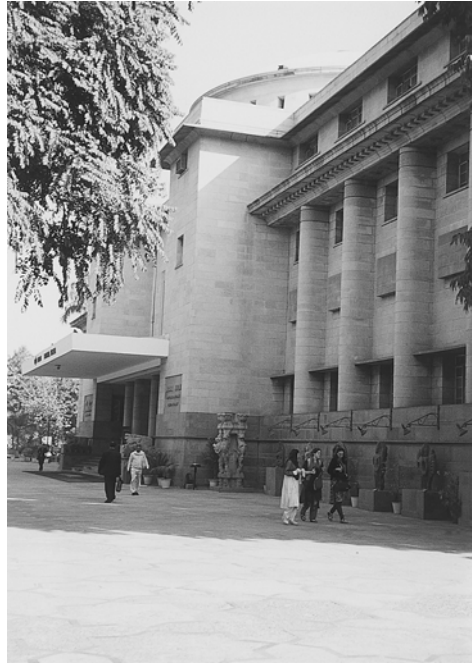
(1) 国立博物館

インドの首都デリーの中心にコーノート・プレイスというところがある。観光客はまずここに集まる、デリーの中心地である。ここから発するジャンパット通りは、首都のもっとも中心的な通りで、コーノート・プレイスから国会議事堂の方にジャンパット通りを数キロいったところに、国立博物館がある。三階建ての立派な建物である。地図でみれば、ここがデリーのど真中にあることがわかる。

一九四七年にロンドンでインドから送られたインド美術品の展覧会が行われたが、国立博物館の設立はこの展示物をインド内で所蔵し展示しようという構想から始まった。当初、ほかの建物に設置されたが、一九六〇年に現在の建物に移転した。インド政府文部省文化局の管轄下にある。この博物館は、二〇万点を超えるインド内外の文物を収集・所蔵している。

博物館玄関の外の庭には、いくつかの石像がある。入場料は、インド人は一〇ルピー、ただし学生は一ルピー。一ルピーは約三円だから、

入場料は三〇円ということになる。日本の物価水準の約一〇分の一だから、日本の物価水準を加味すれば実質的には三〇〇円程度になる。インドの農業労働者の賃金は一日でよくて数十ルピー程度だから、彼らの一日の賃金の数分の一程度になる。だから、博物館に入るのは、庶民から見ればそれほど安いことではない。実際、博物館のインド人の参観者は学生か旅行者か、あるいは中産的な階層であろうというのが、私の印象であった。ちなみに、外国人の入館料は、インド人のその一五倍の一五〇ルピー、カメラを持ちこむとさらに三〇〇ルピー、合計四五〇ルピー（日本円一二〇〇円位）である。これはインドの物価水準から見ればばらばらな額であるが、日本の物価との実質的差異を考えると外国人の負担としては甘受すべき額のうちかもしれない。



③ 国立博物館（デリー）入口

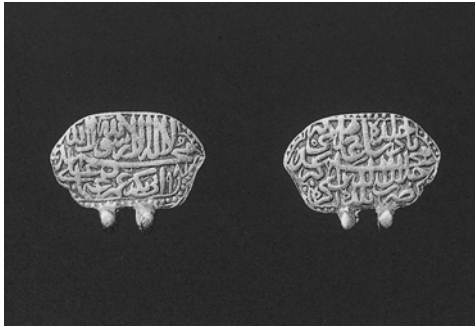
入口を入ると、短い廊下を通過して、半円形の回廊にでる。展示室の多くはこの回廊に面しており、回廊から展示室を選ぶような構造になっっているようだ。自然の流れとしては、まず、第四室「先史・インダス峽谷文明」の部屋にはいる。エジプト、メソポタミア、黄河流域とともに四大文明の一つをなす、インダス文明（紀元前二五〇〇〜一五〇〇年）の部屋で、モヘンジョ・ダロー、ハラッパー、チャスフー・ダロー Chanhu-daro などの都市の遺跡からの発掘物が展示される。インドとパキスタンとの分離の結果、モヘンジョ・ダローやハラッパーはパキスタン領内に入り、発掘物のかなりがパキスタンに移譲されたが、なおかなりの数の重要発掘物が、インドの国立博物館に所蔵されている。パキスタンのパンジャブからインドのグジャラート州ま



④ 国立博物館 入口付近



⑤ 金貨 紀元2世紀



⑥ 金貨 16-17世紀

で、四〇〇の都市が広がったといわれるが、その広い範囲で共通の文化、共通の都市設計・建造物デザインが見られ、レンガのサイズも同一であったという。壺、玩具、動物像、ネックレス、ペンダントなど、多様なものが当時を偲ばせる。銅・青銅品もあり、「踊る少女」と呼ばれる青銅像は有名である。

その奥の部屋は、第五室「マウリヤ・ジュンガ室」である。ここには、インダス文明に引き続く、紀元前四世紀から紀元一世紀のマウリヤ・ジュンガ時代の石彫やテラコッタ（赤土素焼き）が展示される。ジュンガ時代の石彫は、ボダガヤ、サーンチーなどの仏舎利塔の装飾として使われ、ブッダの生涯などを描いている。

この奥は、第六室「クシャーナ朝」（紀元一―三世紀）のもので、ブッダが人間の形で表現されるようになった。クシャーナ朝の主なものは、ガンダーラとマトゥラーからのものである。ガンダーラはギリシャ・ローマの建築や美術・衣服の影響を受けていることは有名である。ガンダーラからは、ギリシャ・ローマの影響を受けたブッダ像が展示されている。衣服はローマの法衣のようなひだで、ブッダの髪はウェーブをしている。他に、マトゥラー地方の彫刻がある。第七・八室の「グプタ朝」（四―六世紀）の時代には石製のヒンドゥー寺院が作られはじめ、ヒンドゥー教にかかわる彫刻が始まる。しかし、まだ、中心はブッダ像である。ヒンドゥーの神、ヴィシュヌの像も現れている。第八室はテラコッタを展示する。

グプタ朝の後の時期、七世紀から一七世紀の時期には、次第にヒンドゥー教に関わる作品が中心になり、一三世紀を過ぎると仏教遺物はビハール州など一部に限定されるようになる。第九室は、この時代を中心とするブロンズの展示室で、インド各地の代表的なブロンズを収集・展示している。ブロンズでは、南インドのものが有名である。躍動感があふれる「踊るシヴァ神―ナタラージャ」は特に有名である。第一〇室や第一一室には、後期のものが展示されている。一階には、この他、通貨や宝石・装飾品の展示室もある。

展示室から回廊にでると、回廊にもブッダ像などがある。円形の中庭にも、全部で一〇程度のブッダ像やヴィシュヌ像が置かれている

（写真参照）



⑧ Vishnu 7～8世紀 南インド



⑦ 国立博物館 1階中庭



⑩ Vishnu15世紀 南インド



⑨ ブッダ 10世紀 南インド



⑫ Vishnu 11世紀 中央インド夫



⑪ 国立博物館 2階回廊



⑭ 王冠をかぶるブッダ
11世紀 東部インド



⑬ Sarasvati
11世紀 マティア・ブラデーシュ州

二階は、さまざまな言語で書かれた書、図書の説明画、絵画の展示室である。この分野では、イスラムの影響は極めて大きい。それ以前の伝統とイスラムの影響が混ざり合って独特の書や説明画や絵画の形が作られていった。ムガル皇帝はアトリエを作ってインド各地からの芸術家を集めて製作にあたらせたという。ムガル皇帝の日常生活を描いたものや、インド古典の説明画など多彩な絵画は、ゆっくり見るに値する。

三階は、織物などが展示されている。

インドを代表する博物館にふさわしく、非常に豊かな所蔵品を誇っている。特に、インダスの発掘物、ギリシャ・ローマの影響を受けたガンダーラの仏像など、高等学校の教科書に載っているものの現物が、さ

りげなく置かれていることには、圧倒される。インドの雄大な歴史の歩みを見事に見せてくれる。

ただ、いくつか気になったことを記そう。第一に、参観順路の途中で展示室の少ない部分が「準備中」となっていて、ロッカーが無造作に置かれている。私は、以前も二回ほどこの博物館を訪れたがそのときも一部が未完成であったような記憶がある。国立の博物館として十分な予算が与えられずに、博物館が所蔵している能力や可能性が十分に展示され、あるいは発揮されていないのではないかと気になる点である。

第二は、博物館と政治との関連で、今後への危惧である。今、インドでは、歴史教科書の改定が重要な問題となっている。ヒンドゥー至上主義的な色彩の濃い現政権は、インド史におけるヒンドゥー的要素をインドの歴史そのものとして重視し、イスラム的要素を外来のものとして捉える視点から、歴史教科書の改変を行おうとしている。歴史学はイスラム的な文化がインドの文化の不可欠な要素を構成していることを示しているが、歴史を国民に提示する場でもある博物館が歴史の歪曲を強制される可能性は小さくないだろうと懸念される。

(2) キャリコ織物博物館

インドの精巧な綿織物は、世界に名だたる産物であった。インドに渡来したイギリス東インド会社は、インドの高級な織物を大量に買い付けてヨーロッパに輸出したが、イギリス産業革命の進行とともに、

イギリスはインドからの綿織物輸入を停止し、逆にインドへイギリスの工場製綿織物を輸出し始めたことは有名なことである。イギリス製の綿織物の大量流入によってインドの手織業が大きな打撃を受けたことは間違いない。イギリス支配に反対する民族運動の中で、インドとイギリスの織物業の帰趨は、象徴的な意味も有していた。イギリス製品との競争にもかかわらず何とか生き残った手織物業をどう守るか、その際インドの優れた織物の伝統をどう活かすか、これは民族運動の中で問われた課題であった。一九四九年に設立された「キャリコ織物博物館 Calico Museum of Textile」の設立を支えた精神は、このようなものであったであろう。Gita Sarahai 夫人は、インドのさまざまな地域の、なくなりつつある精巧な織物を集めて、この博物館を創始した。

現在、この都市にはデザイン研究所があり、インドのデザイン研究の先端を担っているが、キャリコ織物博物館の精神も、インドの織物の優れた伝統を発見し維持し発展させて、織物の発展に寄与するところにある。

国立博物館はじめ他の博物館が、やや暗く重量感のある空間を作りだしているのに対して、キャリコ織物博物館は、明るく、楽しく、瀟洒な雰囲気漂わせている。展示の方法も現代的で、三階から一階まで壁に布を垂らすなど、工夫されている。

博物館は、五世紀以上にわたるインド各地の優れた綿・絹・羊毛の織物を展示する。糸紡ぎ、染色・色のさまざま。有名な絞り染め Ikat



⑮ キャリコ織物博物館
建物の一部には昔の地主の屋敷を利用した



⑯ キャリコ織物博物館の一部

によるグジャラートの美しい織物。オリッサ州、アーンドラプ・ラデシユ州など、それぞれ固有の特徴的なデザインと色合いをもつ。織りには、錦織が入ることがある。金糸や銀糸が用いられる。使われる織機もさまざまである。捺染布の展示場もある。また、刺繍も豊かである。

展示は美しく、インドの織物の多様性と豊さを存分に示してくる。ただ、コレクションは、インドの織物の歴史的順序や変動の過程を示すようには展示

されていない。イギリス支配以前はどうであったか、それがイギリス品との競争や生活・消費の変化に応じてどう変わったかという関心からは、ややものたらなさを感じるが、それはこの博物館の目的がインドの優れたものを時代を超えて保持・発展させようというところにあるためであろう。

最初に記したように、インド各地に発掘の現場があり、そこに現場博物館がある。また、地域の人々の生活の道具を丁寧に展示した博物館もある。これらユニークな博物館はおそらくインドの博物館の重要な特徴を示しているのであるが、これらについて、別の機会を待ちたい。

(一) Shobita Punja, *Museums of India*, New Delhi, Penguin Books, 1998. 以下の記述は、主としてこの本に拠ってゐるほか、以下の情報も参照した。

National Museum, *A Guide to the National Museum*, New Delhi, National Museum, 1997.

<http://www.indianmuseum-calcutta.org/history.html>

<http://travel.indiamart.com/gujarat/museums/caloco-textile-museum.html>
その他のウェブサイト。